

症 例 報 告

下 顎 骨 内 異 物 の 1 例

中 塚 道 郎 伊 藤 信 明 藤 岡 幸 雄
 岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座* (主任: 藤岡幸雄教授)

[受付: 1983年3月11日]

抄録: 18歳女性の下顎骨内異物の1例に遭遇したので報告する。異物は歯科治療時に抜歯窩に迷入したと思われるアマルガム塊で、4年間無症状で経過したが、同部の補綴処置時に偶然発見された。異物は比較的容易に摘出され、10カ月後の現在経過は良好である。

Key words: foreign body, amalgam, mandible

緒 言

歯科治療時に迷入した異物は、ほとんどの場合、術者がこれに気づき除去されるが、まれには見過ごされ、しかも無症状のまま長期間残留するものもある。私達はこのような下顎骨内異物の症例を経験したので報告する。

現症: 体格は中等度, 栄養状態は良好である。顔貌は左右対称, 顔色良好で, 開口障害は認めない。顎下リンパ節は, 右側に小指頭大, 左側に小豆大のものを各1個触知するが, 共に

症 例

患者: 田○牧○, 18歳, 女性。
 初診: 昭和57年1月30日。
 主訴: 6̄部が気になる。
 既往歴, 家族歴: 特記事項はない。
 現病歴: 約4年前, 某歯科にて多数歯にわたるう蝕治療と6̄の抜歯処置を受けた。その後, ⑦6̄⑤の架橋義歯を装着し, 特に症状なく経過したが, 約1カ月前に同義歯の破損に気づき某歯科を受診したところ, X線診査にて6̄相当部の異常を指摘され, 当科に紹介, 来院した。



図1 初診時の正貌

A case of foreign body in the mandible
 Michiro NAKATSUKA, Nobuaki ITO and Yukio FUJIOKA
 (Department of Oral Surgery I, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 020)
 *岩手県盛岡市中央通1丁目3-27 (〒020) Dent. J. Iwate Med. Univ. 8 : 99 : -102, 1983

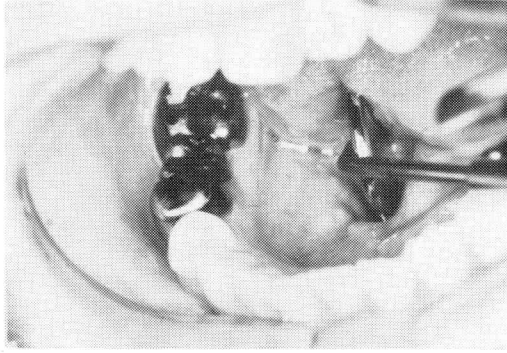


図2 初診時の口腔内所見

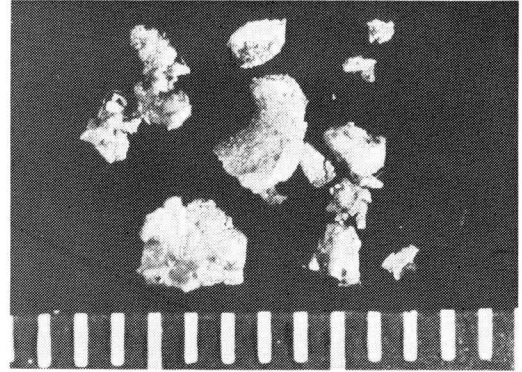


図4 摘出物

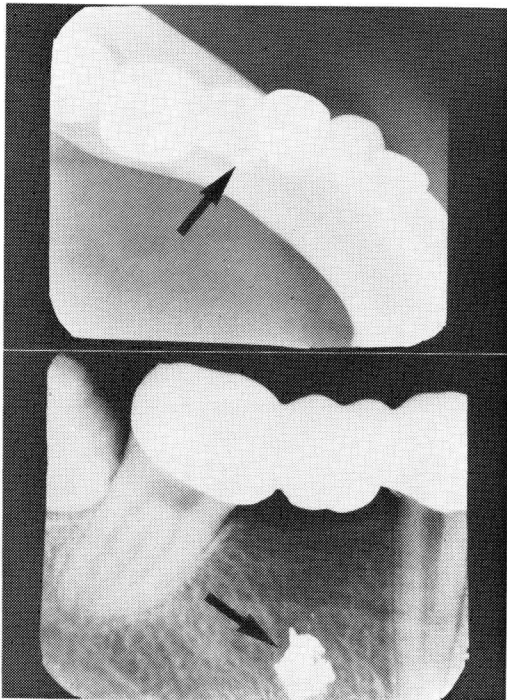


図3 初診時のX線所見

可動性で圧痛はない。口腔内では、 $\overline{765}$ 架橋義歯の7部咬合面に咬耗による穿孔を認める。75は動揺、打診痛なく、周囲軟組織にも特に異常所見をみない(図1, 2)。

X線所見： $\overline{6}$ 根尖相当部の顎骨内に骨梁にかこまれた小豆大、菊花状の境界明瞭な不透過像を認める。周囲骨組織には異常を認めない(図3)。

臨床診断：下顎骨内異物(金属性充填物の疑い)



図5 術後10ヶ月目のX線所見

処置および経過：昭和57年2月18日、 $\overline{765}$ 架橋義歯を除去し、局麻下に $\overline{7-4}$ 部に切開を加えて頬側歯肉骨膜弁を形成し、同部の骨を露出した。 $\overline{6}$ 根尖相当部の皮質骨を削除して異物に達した。異物は暗灰色を呈し、歯牙充填時の形態を保ったアマルガム塊であり、骨梁によって完全にとりかこまれていた。これを歯科用鋭匙にて搔爬、摘出したが、もろく、十数個に破折した(図4)。術後10カ月の現在、良好に経過している(図5)。

考 察

顎顔面口腔領域での異物迷入の報告は比較的多い。喜田ら¹⁾は本邦での52症例について検討を加え、年齢、性別では20歳代の男性に多く、

顔面頰部が好発部位と述べている。異物の種類は、ガラス²⁾、植物³⁾、魚骨⁴⁾、金属⁵⁾などと多岐にわたっている。また異物迷入の原因には、交通事故⁶⁾、戦争⁶⁾、射撃事故⁷⁾などもあるが、この領域での特徴として歯科医療事故による異物が多いことがあげられる。

歯科医療事故による異物には、ブローチ⁷⁾、タービン⁸⁾、注射針⁹⁾、歯牙¹⁰⁾、充填物¹¹⁾などさまざまなものがみられるが、その多くは軟組織内への迷入であり、本例のような顎骨内異物の例は少ない。本邦での顎骨内異物の報告は、工藤ら(根充剤)¹²⁾、寺本ら(根充剤)¹³⁾、森田ら(挺子破折片)¹⁴⁾、高森ら(挺子破折片)¹⁵⁾などの数例を散見するにすぎず、アマルガムの顎骨内への迷入例は、われわれが文献を渉猟した範囲ではみあたらない。その限りでは本例はまれなものといえよう。

異物によって惹起される症状として、異和感¹⁶⁾、感染による瘻孔形成と排膿³⁾、開口障害²⁰⁾、神経痛様症状¹⁶⁾、脳症状¹⁷⁾、知覚麻痺²¹⁾などが報告されている。しかし出現する諸症状ならびにその有無は、異物の性状、迷入部位、異物に対する生体の組織反応によって大きく異なり、本例のようにまったく無症状に経過するものもある。本例の場合、X線的にも、また手術時の肉眼所見でも通常の異物処理機転、すなわち肉芽組織による被包化などの所見がみられなかったことから、アマルガムの骨組織に対する親和性が高いと考えられ、また異物

が神経に接せず、しかも顎骨内という外的影響を受けにくく安静を保ちやすい部位にあったなど、たまたま条件がそろったため症状の発現をみるのがなかったものと思われた。

無症状のものは生体内異物滞留期間が概して長い傾向にあり、本例も4年間と比較的長い部類に属する。過去の症例中最長のものでは、40年間注射針が放置された例⁹⁾、同じく40年間砲弾片が頰部に存在したという報告⁶⁾がみられる。

本症の診断は、主にX線撮影によってなされるため、X線透過性の植物性異物やガラス片では診断に困難をきたす場合も出てくるが、本例のようにX線不透過性の異物では診断は容易である。しかし、その存在部位を確定するため多方向、少なくとも2方向からのX線撮影が必要である。

本例での異物迷入の成立機転は、アマルガムが充填時の形態を保っていたことから外力によって顎骨内に圧入されたものとは考えがたく、また問診によって、6の抜歯と同時に多数歯のう蝕処置を行った事実が判明していることから、二次う蝕などのため除去されたアマルガム充填物が6の抜歯窩に落下迷入し、歯科医がこれを見過ごし、抜歯窩がアマルガム充填物を包含したまま骨性治癒したものと考えられる。多数歯を同時に処置する場合、除去物の確認はもちろんのことであるが、さらに外科処置は最後に行う慎重さが必要であろう。

Abstract : In this paper we report on a case of foreign body embedded in mandible of 18-year-old girl. The foreign body which was removed by surgical operation was a mass of amalgam. The prognosis of the patient is extremely favorable.

文 献

- 1) 喜田豊子, 兼松宣武, 土井 尚, 若山浩子: 頰部異物の1例, 日口外誌, 20: 286-289, 1974.
- 2) 木村友七, 宝田 博, 中島清記: 側頭窩下に圧入されたガラス片により開口障害を起した1例, 日科誌, 12: 86-89, 1963.
- 3) 大野輝男, 中村雅明, 森永 太, 松瀬洋一, 亀山忠光, 朱雀直道: 異物の迷入による慢性頰部炎

症の2例, 日口外誌, 22: 211-216, 1976.

- 4) 奥井 寛, 石川武憲, 前島 明, 井上雅嗣, 下里常弘, 今田 忍: 魚骨と考えられる異物迷入により顎下唾液腺に発生したいわゆる Küttner Tumor の1症例, 日科誌, 28: 374-375, 1979.
- 5) 安藤美明, 木村仁彦, 柿沼弘二, 中田杉太: 下顎骨異物の摘出例, 日科誌, 10: 231, 1961.
- 6) 田中弥興, 宇治保義, 坂本彰宏, 田縁 昭: 口腔組織内異物の1例, 日口外誌, 28: 1376, 1982.

- 7) 木次英五, 新藤潤一: ロ蓋舌弓付近にブローチの破折迷入した1例, 口科誌, 21 : 757-762, 1972.
- 8) 坂元晴彦, 朝倉昭人, 村本 明, 山口 清: タービンパーの舌正中部迷入例, 日口外誌, 25 : 1437-1439, 1979.
- 9) 高橋庄二郎, 大井基道, 古沢正己: 長期にわたり下顎孔伝達麻酔時の破折注射針を有する2例について, 日口外誌, 17 : 340-343, 1971.
- 10) 堀田 一, 河合 男, 河合 宏, 国藤昌樹: 8 抜去途中行方不明になったその歯牙を1年1ヵ月後に取り出した1症例, 口科誌, 16 : 411-412, 1967.
- 11) 小野進一郎, 山本美朗: 診療事故3例, 日口外誌, 15 : 263, 1969.
- 12) 工藤啓吾, 小川邦明, 山崎ひとみ, 横沢昭平, 山岡 豊, 鈴木鍾美: 下顎管へ迷入した N₂ 根管充填剤を除去した1例について, 岩手歯誌, 1 : 42-45, 1976.
- 13) 寺本光広, 若林明人, 各務和宏, 藤井春男, 古橋竹文, 深谷昌彦: 糊剤根充剤過剰根充患者に生じた片側性多発性脳神経麻痺症の1症例, 口科誌, 28 : 363, 1979.
- 14) 森田章介, 井上雅裕, 中島正博, 岡野博郎: 口腔内異物の4症例について, 日口外誌, 27 : 761-766, 1981.
- 15) 高森晴己, 亀山嘉光, 山田長敬: 顎骨内異物の1例, 口科誌, 30 : 353, 1981.
- 16) Levin, I. S. : Trigeminal neuralgia due to a foreign body., report of a case, Oral surg, 16 : 668-670, 1963.
- 17) 岩本康公, 井上靖彦: 脳腫瘍を疑わしめた口腔内異物例, 口科誌, 6 : 95-97, 1963.